

# 詞華集としての西欧詩の訳詩集：堀口大學編訳『月下の一群』を中心に

大村 梓

Translation of Western Poetry in a Tradition of Japanese Poetry Anthology:  
A Case of *Gekka no ichigun* edited and translated by Horiguchi Daigaku

OMURA Azusa

## Abstract

Japan has a long history of poetry anthology, beginning with the *Man'yōshū*. Some *Chokusenshu*, or anthologies edited by imperial command, deliver a certain message. After the Meiji restoration, the tradition gradually disappeared, and in its place emerged an anthology of translations of Western poetry. Young poets and novelists learned new modes of expression from the foreign poems and used them in their works. This paper analyzes one of the notable translations of Western poetry, *Gekka no ichigun* (*Poets Under the Moon*), by comparing it to *Kaicho on* (*The Sound of the Sea Tide*) edited and translated by Ueda Bin. Although both Horiguchi and Ueda translated same French Modernist poems, their translations have different features; Ueda's translation emphasizes a beauty of passage in Japanese language, while Horiguchi's translation employs a colloquial style in attempt to encourage Japanese readers to understand the Western poetry apart from the Japanese literary tradition. These differences arise in part from the translators' respective backgrounds. As an intellectual, Ueda felt compelled to invent a new style of writing that was suited to portraying a new and modern Japanese culture. Having spent most of his 20s abroad, Horiguchi was relatively untethered from the Japanese literary tradition. He translated Western poetry that he enjoyed and his love of Western poetry popularized it among young Japanese.

キーワード：翻訳、『月下の一群』、堀口大學、『海潮音』、上田敏

key words: translation, *Poets Under the Moon*, Horiguchi Daigaku, *The Sound of the Sea Tide*, Ueda Bin

## はじめに

明治以降、西洋の思想・学問を学ぶために多くの書物が日本語に翻訳された。文学においてはデフォーやリットン、またスウィフトやモア、シェイクスピアの作品が翻訳された。西洋の文学や思想が日本に移入される過程で日本に伝統的な詩歌の形態はその存続が脅かされることとなる。正岡子規は「歌よみに与ふる書」(1898年)において日本詩歌が西洋の影響を受け入れて変化していく必要性を「生は和歌に就きても旧思想を破壊して、新思想を注文するの考にて、随つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候。」<sup>1)</sup>と説

いた。また現在ではアンソロジーや名詩選集とも呼ばれる万葉集まで遡ることのできる詞華集の伝統は日本の文学史において重要な存在である。古今和歌集をはじめとする天皇の命によって編まれた勅撰集は所収する歌と歌の並びによって読み手に対してメッセージを送る。例を挙げれば小倉百人一首を編んだ藤原定家の思惑を平安朝貴族社会への憧憬と読み取ることができる。<sup>2)</sup>日本では幾度も詞華集が編まれてきたが、明治以降の日本ではこの伝統はすっかり廃れてしまった。丸谷才一はその状況を次のように嘆いた。

---

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

〔前略〕ところが明治末年以後、われわれの文学はいきなり詞華集のない文学になってしまった。それは日本文学が個人主義的なものになったことの端的なあらはれである。〔後略〕<sup>3)</sup>

確かに「和歌」は「短歌」へと姿を変え、日本に伝統的な短詩は姿を消しつつあった。代わりに西欧からやってきた西欧詩が日本近代詩の形を作り上げた。詞華集は何が良い詩がということについての社会的合意に基づいていると丸谷は主張する。<sup>4)</sup> つまり多くの読み手が叙情に対してある程度共通の理解を行う必要性がそこには存在する。それが西洋の個人主義的な価値観を取り入れたことにより不可能になってしまったと言うのであった。

確かに短詩の詞華集は次第に見られなくなったかも知れないが、そこに西欧詩の訳詩集が登場する。明治以降に西欧詩を学ぶためにいくつかの訳詩集が発表された。それら訳詩集は近代日本の詩人・作家たちが新しい表現を作り出す源泉となった。明治以降の名高い訳詩集として、外山正一他編訳『新体詩抄』(1882)、新声社編訳『於母影』(1889)、上田敏編訳『海潮音』(1905)、永井荷風編訳『珊瑚集』(1913)、堀口大學編訳『月下の一群』(1925)が挙げられる。丸谷は詩を選択するという過程を経ることによって、訳詩集を詞華集と呼ぶことができると『珊瑚集』や『月下の一群』を挙げて紹介している。<sup>5)</sup> いずれの訳詩集も発表当時に大きな反響を呼んだものである。『月下の一群』は堀口大學(1892-1981)が1910年代から1920年代前半にかけて、外交官である父親の仕事に伴って諸国遊学していた時に行った訳詩を中心としたものである。安藤元雄は『月下の一群』をこれらの一連の訳詩集の流れに位置づける。<sup>6)</sup> 『月下の一群』に所収されたマラルメやボードレー、そしてヴェルレーヌには現代読者に向けた新訳が存在するのにも関わらず、大學の翻訳が今でも読まれ続ける理由は何であろうか。そこには時にライトヴァースとも評される、大學の口語に近い文体や簡潔な表現が理由として挙げられるのではないだろうか。<sup>7)</sup> これまでの研究では大

學の個々の翻訳が取り扱われ、近代文学者たちの西欧文学受容を解明するための一側面としてみなされることが多かった。本論文では西欧詩の訳詩集の流れの中で『月下の一群』の特徴を明らかにし、所収されたヴェルレーヌの詩を中心に大學が日本語に移入しようとしたフランス詩の趣とは何であったのかを明らかにしたい。

## 1. 明治・大正・昭和初期の西欧詩の訳詩集

まず明治以降の訳詩集の流れを整理しておきたい。西欧詩の訳詩集のはじまりと考えられるのは外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎が編訳した『新体詩抄』であろう。新体詩、つまり日本の伝統的な短詩の形式ではない西欧詩に影響を受けた新しい詩の形である。本訳詩集には訳詩が14編(イギリス、アメリカ、フランス)、創作詩が5編所収されている。その序に「西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ」<sup>8)</sup>と記されているように、本訳詩集に所収された作品は西洋詩の影響を強く受けたものであった。日本文壇に新しい詩の形式を導入したという意味でこの詩集の意義は大きい。またこれ以降、この新体詩という形式の追随者も多く見られた。<sup>9)</sup> 次に新声社(森鷗外、小金井喜美子、市村瓊次郎、落合直文、井上通泰等)によって翻訳・編集された『於母影』が1889年に発表された。そして1905年に刊行されたのが上田敏(1874-1916)訳・編の訳詩集『海潮音』である。フランス象徴派、高踏派の詩を日本文壇に紹介するなど重要な役割を果たした。序の冒頭で「巻中収むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、独逸に七人、プロヴンスに一人、而して仏蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに属する者其大部を占む。」<sup>10)</sup>と述べているように、フランスの詩が多く翻訳されている。大學編訳『月下の一群』と共通する詩人も取り上げられているが、選択した詩と文体の創意工夫に差が見られるなど両訳詩集の特徴は異なっている。

そして永井荷風編訳『珊瑚集』が1913年に発表される。荷風はすでにフランス作家ゾラの日本への紹介者として知られていた。荷風が慶應義塾

大学で教授陣に名を連ねていた時に大學は同大学で学び、大學の訳詩集『昨日の花』（1918）に荷風が序文を書き送るなど、<sup>11)</sup> 大學は晩年まで荷風と親交があったようである。<sup>12)</sup> 上田敏も永井荷風もフランスを訪れたことがあり、滞在記（荷風『ふらんす物語』、1909）も残っているが、彼らと大學を区別するものはその異文化体験の深度であろう。大學の父親は外交官であり、大學の実母である妻亡き後はベルギー人女性と結婚し、家庭内の言語はフランス語であったとされている。そして大學は父親の仕事に同行し20代の大半を異国で過ごしている。大學の海外滞在経験について荷風は次のように述べている。

[前略] げに君は久しくかの国にありてその思ふ所その見る所感ずる所のものをかの国々の新しき詩に托して漂泊の悲しみを慰めたまひき。その選びとりて翻訳せられしもののおのづからその折々の君が心にいと近くいと親しきものなりしや言ふをまたず。然りとすれば此翻訳一卷の詩は君を知るわれ等に取りては豈只に尋常一様の翻訳詩とのみ看過すべきものならんや。昨日の花はまことにこれ君が深き思出の花ならでやは。<sup>13)</sup>

ここで荷風が指摘しているように、『月下の一群』に所収されたそれぞれの詩は異国における大學の青春時代と深く結びついている。また敏をはじめとする先人の翻訳家が西洋諸国の詩から近代詩の新しい表現を作り出そうと苦心した文学者としての責務のようなものから、日本を遠く離れていた大學は比較的自由的な存在であった。

1925年、33歳のときに大學は外交官としての仕事を終えた父親と共に帰国し、その後は日本に定住する。大學は異国の地からも精力的に訳詩や創作詩を文芸雑誌に投稿していたが、帰国から半年ほど経った9月、堀口大學編訳『月下の一群』が発表される。この訳詩集は『昨日の花』、『失われた宝玉』（1920）、『サマン選集』（1921）に所収された訳詩に新訳を加え、66人のフランス近代詩の詩人の340編の詩を取り上げている。この

訳詩集は大學の作品の中でもひととき目立つ存在であり、フランス近代詩の訳詩集として今日まで読まれ続けている。大學が白水社あとがきで述べているように、<sup>14)</sup> 大學は訳詩に手を染め始めた頃の青春期には敏編訳『海潮音』には目を通していないため、敏訳から『月下の一群』への影響はほぼないと推測される。2人は同じ詩をいくつか翻訳しているが、もし大學が敏の翻訳に先に目を通していたら『月下の一群』の特徴は失われていたかもしれない。

以上のように西歐詩の訳詩集の流れを見てきたが、戦前・戦後を代表する文学者である伊藤整はこれら訳詩集について次のように述べている。

[前略] 近代フランスの詩のエッセンスとも言ふべきこの訳詩集 [『月下の一群』] は、私のみでなく昭和期の新詩人たちにどれほど大きな影響を与へたか分らない。「於母影」が明治の詩の源泉であれば「海潮音」と「珊瑚集」は大正の詩を生んだ母胎であり、「月下の一群」は昭和の詩の大きな源泉をなしたと言つていいであろう。大正十二年に鈴木さんは伊勢の学校へ行つたから、私はほとんど孤独で熱心にこれ等のものを読みあさり、また自分の作品のノートをいくつも作つて持つてゐた。<sup>15)</sup>

伊藤が述べているように、それぞれの訳詩集は明治・大正・昭和という異なる元号で発表されている。それぞれの時代の文学的傾向に強く影響を与え、『月下の一群』は特に戦後に連なる昭和の詩の源泉となったというのだ。大學の文体が口語体に強く影響を受けた簡潔な語彙や表現を選んでいた理由はその時代性もあったのかもしれない。<sup>16)</sup>

そして『日本近代文学大事典』は『月下の一群』の詞華集としての意義を次のように述べる。

[前略] 訳者 [堀口大學] はもともと「秩序あるフランス近代詩の詞華集<sup>アンソロジー</sup>を作り上げようなどといふ野心」はなく、「何のあてもなく、ただ訳してこれを国語に移しかへる快樂の故

にのみなされたもの」のうちから、自分の「詩眼の評価で選択して作られたのがこの集」だという。この点、訳出原詩の多くを外国の詞華集にたよったといわれる上田敏訳『海潮音』や、象徴主義詩を中心とした永井荷風訳『珊瑚集』とは、明確な一線を画さなければならない。すなわち本書『月下の一群』は、広大なフランス詩の原野を「訳者の好愛を唯一の尺度」に涉猟し、集積した訳詩から成った、いわばてまひまかけた手づくりの詞華集なのである。したがって訳者の原詩との共感が生のまま盛られ、訳詩ながら日本詩の風土に潑刺とした息吹きをもって定着した。『月下の一群』が新しい日本詩の「好箇の見本帖」となり、昭和詩の源泉となったのは、アポリネールをはじめとする「未来派、立体派、ダダ、シュールレアリスム等の名に於いて、まさに作られつつある」同時代の詩であり、その訳詩語法の創造である。〔後略〕<sup>17)</sup>

詩の選択（編集）と翻訳という行為の2つが一緒になって初めて西欧詩の訳詩集を詞華集と呼ぶことが可能になる。しかしその行為を実際に行ったのは大學ただ1人であったのではないか、ということここでは指摘している。大學は1910年代から1920年代前半にかけてフランスをはじめとするヨーロッパ諸国及び南米ブラジル等に滞在しているときにフランス近代詩に深く親しんだ。慶應義塾大学での学友であり、新詩社とともに学んだ友人佐藤春夫は大學の幸運な境遇について次のように述べている。

僕はまた感ずる。たとひ君のやうな高雅な閑人にしても、絶好の状態においての十年といふ閑散がなかつたならば、六十六家、三百有四十篇といふこのやうな豊富な訳詩は絶対にあり得なかつたであらう。君は天に感謝しなければならぬ。さうして僕たちも。君はのらりくらりと遊び暮して、心のままに摘むうちに、ついすばらしい花束をつくりあげてゐたのだよ。〔後略〕<sup>18)</sup>

佐藤が指摘する大學の10年間に渡る異国滞在（「絶好の状態においての十年といふ閑散」）が、『月下の一群』を他の訳詩集と区別する重要な要因であったことは確かである。大學が手にとることができた書物の数は、明らかに同時代の他の文学者よりも多かったであろう。また大學は西欧詩の評判や解釈を現地の文学者たちと議論することができたのである。それらは大學の西欧詩の理解をより深いものにすることを可能にしたであろうし、西欧の風景と文化に身を置く自らと重ね合わせて詩を読むことを可能にした。

次に訳詩集の中でもフランス近代詩の翻訳書として名高い『海潮音』と『月下の一群』の所収詩を比較分析していくことで、『月下の一群』の特徴がどこにあるのかを明らかにしていきたい。

## 2. 訳詩集の特徴：詩と詩人の選択から

実際に所収されている詩と詩人の特徴を考察していく前に、堀口大學と上田敏の翻訳に対する姿勢を明らかにしたい。敏は『海潮音』の冒頭で次のように述べている。

高踏派の壯麗体を訳すに当りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉体を翻するに多少の変格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが為なり。<sup>19)</sup>

訳述の法に就ては訳者自ら語るを好まず。只訳詩の覚悟に関して、ロセッティが伊太利古詩翻訳の序に述べたと同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自国詩文の技巧の為め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語訳は必らずしも忠実訳にあらず。〔後略〕<sup>20)</sup>

また「小生の翻訳」という文で敏は「又もし小生自身にして自身の事を言ひ得べくば、仏訳に拠つた小生の翻訳は他に文芸として優れた良好の翻訳が出る迄、それ相応の役を足すものである。」<sup>21)</sup>

と述べている。つまり日本語読者にとって翻訳は、日本語で「文芸作品」ではなければいけないとする翻訳語の文化圏の影響（文学的潮流、読者層等）を重視する敏の翻訳態度が分かる。アンドレ・ルフェーブルは翻訳テキストが翻訳語の文化圏の影響を強く受けることによって、原文とは全く異なるテキストに書き直される（rewriting）可能性を論じている。<sup>22)</sup> また「逐語訳は必ずしも忠実訳にあらず」という翻訳テキストにおける詩の叙情（清新の趣味）を重要視する敏の態度は後述する「落葉」の翻訳テキストという結果へと繋がっていくのではないだろうか。

一方で大學は次のように述べている。

読者の見らるとほり、私がこの集の訳に用ひた日本語の文体には、或は文語体があり、或は口語体があり、硬軟新古、実にあらゆる格調がある。然しそのいづれの場合にあつても、私が希つたことは、常に原作のイリュージョンを最も適切に与へ、原作者の気稟を最も直接に伝へ得る日本語を選びたいと云ふ一事であつた<sup>23)</sup>

この言葉だけを見れば大學は原作の叙情を重視し、それを日本語に移し替えるのに苦心したと考えられる。敏が翻訳は文芸作品に見合う役割を果たすものであると述べ、翻訳テキストが翻訳語の読者の批評眼に耐えうるものにすべきであると考えたことと比較するとどちら（原語と翻訳語）の叙情を大切にするのかというところに2人の翻訳

態度の違いが見られる。もちろん大學は原作の叙情に重きを置くあまり、日本語で理解が不可能な結果を招いていいとは言っていない。またこの両者の翻訳態度の違いには大正詩の源泉としての西欧詩への期待を背負った敏の立場と、大正・昭和文壇とは遠く離れた地で翻訳・創作に励んでいた大學の立場の違いが影響しているのかもしれない。

それでは『海潮音』と『月下の一群』に所収されている詩人の整理を行いたい。この2編の訳詩集に共通して取り上げられている詩人は以下の表のとおりである。

共通して取り上げられている詩人は6人である。それぞれの訳詩集に個々に取り上げられている詩人の特徴について少し述べると、『海潮音』にはイギリスのシェイクスピアやロバート・ブラウニングなどフランスに限らない多彩な詩が取り上げられている。そして詩人に関する簡単な紹介文が付記され、読者の西欧詩についての知識不足を補っている。それによって『海潮音』は「文芸」でもあるが西欧詩のテキストブック、もしくは啓蒙書の様相も呈している。また作家としても活躍していたヴィクトール・ユゴーの詩が『海潮音』には所収されている。冒頭のみ紹介する。

良心

革衣纏へる児等を引具して  
髪おどろ色蒼ざめて、降る雨を、  
エホバよりカインは離り迷ひいで、  
夕闇の落つるがまゝに愁然と、

表 1<sup>24)</sup>

詩人	所収された詩の数（『海潮音』）	所収された詩の数（『月下の一群』）
Henri de Régnier	3	11
Émile Verhaeren	6	2
Charles Baudelaire	5	2
Paul Verlaine	3	9
Albert Samain	1	17
Stéphane Mallarmé	1	3

大原の山の麓にたどりつきぬ。  
妻は倦み児等も疲れて諸声に、  
「地に伏していざ、いのねむ」と語りけり。  
山陰にカインはいねず、夢おぼろ、  
鳥羽玉の暗夜の空を仰ぎみれば、  
広大の天眼くわつと、かしこくも、  
物陰の奥より、ひしと、みりたるに、  
わなゝきて「未だ近し」と叫びつつ、  
倦みし妻、眠れる児等を促して、  
もくねんと、ゆくへも知らに逃れゆく。<sup>25)</sup>

この詩は七五調で訳され、「良心」という題名や「エホバ」や「カイン」という言葉から分かるように信仰に根ざした題材を描いている。すでに与謝野晶子『みだれ髪』(1901)において聖書の思想が取り入れられているため当時の読者にとってはそれほど新しい話題ではなかったかもしれないが、七五調を用いることによって日本語読者には馴染みのある語感を生み出している。また敏はこの詩の末尾にユゴーについての説明文を付記している。

ユウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にして狂飈激浪の如くなれど、温藉静冽の気自から其詩を貫きたり。対聯比照に富み、光彩陸離たる形容の文辞を豊用して、燦爛たる一家の詩風を作りぬ。<sup>26)</sup>

このような訳者による原作者像の形成は、特に原作者が翻訳語の文化圏において無名の場合に作品の受容に強く影響を与えると考えられる。ユゴー作品の日本受容に関しては、1889年と1891年に森田思軒がユゴー作「探偵ユーベル」を訳している。そして黒岩涙香が『噫無情』という題名で1902年にレ・ミゼラブルの日本語訳を発表している。よって敏の『海潮音』の時代には日本語読者の中にはすでにユゴー受容がある程度できあがっていたと考えられる。この「性情奔放にして狂飈激浪の如く」であるとされる敏のユゴー作品評は、『噫無情』における悲劇とドラマチックな展開が反映されているのかもしれない。

また『月下の一群』にはフランスモダニズム作家であったポール・モーランの詩が含まれていることも特筆に値するだろう。詩の冒頭を引用する。

恋慕流し          ポール・モオラン

かの女が支払停止をしたので  
われ等かの女の恋人、われ等かの女の株主、  
われ等とざされた戸口の前で、かうして待つてゐるのです。

真夜中だ。かの女は眠つてゐるのでせうか？

この集会などは気にもかけずに？

私の持病の狭心症は今夜も軽くはならぬらしい。<sup>27)</sup>

モーランの作品は虚実織り交ぜた消費主義社会やきらびやかな国際都市を表象するように女性登場人物を描いたものが多い。そして外国人女性は豪華な富を浪費する魅力的だが愚かな存在としてよく描かれている。<sup>28)</sup> この詩もモーランのそういった作風を思い起こさせるものである。実は大學はモーランの長編を多く訳し、モーランを日本文壇に紹介した立役者である。『月下の一群』には何も書かれていないが、大學によるモーランの最初の訳文テキスト(第2次『明星』誌面にて発表)にモーランの紹介を付記している。

ポール・モオランの小説にあつては、すべてが新らしい。既にその題材が新らしい。感覚が新らしい。文章が全全新らしい。ポール・モオランは仏蘭西語に一つの新しい生命を与へた。彼は花合戦を一行半で描く。<sup>29)</sup>

大學が紹介するまでモーランが日本で全く無名だったことからすると、大學のモーラン紹介文は日本でのモーラン作品受容により強い影響を与えたと考えて間違いのないであろう。モーラン作品はその大胆な比喩とイメージが豊富に取り入れられた表現によって日本モダニズムグループ新感覚派の誕生に影響を与えたと言われ、発表当時賛否両論を呼んだ。実は第2次『明星』に初めて訳文が

掲載されたときに大學は過度な性描写からの発禁処分を恐れて冒頭部分しか翻訳していない。<sup>30)</sup>当時の日本文壇で無名の作家の作品をあえて紹介するということから、大學にとってこの詩集は自らが純粹に読んで楽しんだものを集めた結果といえるのではないだろうか。

### 3. 訳詩集の特徴：共通する詩人の作品の比較考察から

それでは堀口大學編訳『月下の一群』の特徴を明らかにするために、上田敏編訳『海潮音』と共通して取り上げている詩人ポール・ヴェルレーヌの訳詩における文体と題材の特徴を分析していきたい。

ヴェルレーヌという象徴派を代表するフランス詩人は1844年に生まれて1896年に亡くなるまで数多くの詩を書き残した。ヴェルレーヌの作品を敏は3編、大學は9編訳している。また敏訳の特徴として、前述したように詩人に関する説明書きが付記されている。ヴェルレーヌについては「仏蘭西の詩はユウゴオに絵画の色を帯び、ルコント・ドゥ・リイルに彫塑の形を具へ、ゾルレエヌに至りて音楽の声を伝へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを捉へむとす。」<sup>31)</sup>と記している。この敏の「音楽の声」という表現を用いたヴェルレーヌ評は「落葉」の詩を連想させるものである。

それではそれぞれの訳詩集に所収されたヴェルレーヌの詩を詳細に見ていこう。『海潮音』には「譬喩」、「よくみるゆめ」、「落葉」が所収されている。一方、『月下の一群』にはその3倍の9編の詩（「秋の歌」、「われの心に涙ふる」、「暗く果なき死のねむり」、「風」、「若い哀れな牧人」、「青空」、「あかつきの星に」、「哀歌」、「倫敦ブリッチ」）が所収されている。2つの訳詩集に共通している詩は原題「Chanson d'automne」（上田は「落葉」、大學は「秋の歌」と訳出）である。

敏が訳した「譬喩」は信仰心に根ざした祈りの詩であり、「よくみるゆめ」は恋い焦がれる女性に想いを巡らす詩である。そして「落葉」は秋の物悲しさに心情を描いた詩である。大學と比較すると3編の詩には題材の面においてあまり共通点

は見いだせない。そして敏がヴェルレーヌの紹介文で書いたような「音楽の声」は明らかに「落葉」の中に見られる。原文と比較すると敏訳文テキストの文体と表現の特異さは際立つが、「音楽の声」はこの作品から響いてくる。

一方、大學が訳した9編の詩には自然を題材にしたものが多く含まれている。「秋の歌」は落葉と風に心情を描き、「われの心に涙ふる」は雨を涙に表し（「巷に雨の降る如く／われの心に涙ふる。／かくも心に滲み入る／この悲みは何ならん？」<sup>32)</sup>）、「風」は鬱屈とした心の悩みをさまざまな風の情景と重ね合わせ（「君は云ふらん また風は／流るる水の水底の石の音無き揺ぎよと。」<sup>33)</sup>）、「若い哀れな牧人」は蜜蜂を用いて恋模様を表している（「蜜蜂が怖いやうに／私には接吻が怖い／夜も寝られずに／私は心配だ／私には接吻がこはい！」<sup>34)</sup>）。大學が選んだヴェルレーヌの詩の中で用いられる「青空」という単語は人生の明るい部分を描き出しているようである。「屋根の向ふに／静かに澄んだ青空！／屋根の向ふに／葉をゆる一本の木。」<sup>35)</sup>（「青空」）。「朝の光が青空に消してゆく／お前のまなざしを此方へお向け／——実のつた麦の畑の／何と云ふよろこばしさ！——」<sup>36)</sup>（「あかつきの星に」）。いずれも肯定的なイメージを詩の中に作り出すために「青空」という単語が用いられている。落葉や雨、風が人生の厳しさや鬱屈とした感情を思い起こさせるのは、日仏共通の視点であったようだ。

それでは両者に訳されている「Chanson d'automne」を比較分析していこう。まず原文を挙げる。

#### CHANSON D'AUTOMNE

Les sanglots longs  
Des violons  
De l'automne  
Blessent mon cœur  
D'une langueur  
Monotone.

Tout suffocant  
Et blême, quand  
Sonne l'heure,  
Je me souviens  
Des jours anciens  
Et je pleure ;  
  
Et je m'en vais  
Au vent mauvais  
Qui m'emporte  
Deçà, delà  
Pareil à la  
Feuille morte. <sup>37)</sup>

原文は秋の情景と主人公の心情を重ね合わせ、秋のヴァイオリン、つまり風の音と鐘の音も相まった聴覚的効果と落葉が舞い散る視覚的効果の2つが複雑な詩情を織りなしている。秋に相応しい自然の風景として容易に落葉が想像されるが、落葉が風に吹かれて舞い散る様子と混沌とした主人公の心情も同時に描かれているようである。小倉百人一首に所収された歌には秋を詠んだものが多いように、西欧の叙情にそれほど親しんでいない当時の日本語読者の心情にも十分訴えかけてくる題材である。

次に敏訳である。

#### 落葉

秋の日の  
ギオロンの  
ためいきの  
身に志みて  
したぶるに  
うら悲し。

鐘のおとに  
胸ふたぎ  
色かへて  
涙ぐむ  
過ぎし日の

おもひでや。  
  
げにわれは  
うらぶれて  
こゝかしこ  
さだめなく  
とび散らふ  
落葉かな。<sup>38)</sup>

『海潮音』に所収された他の2編と比べ、明らかにこの詩は原文からの開きが大きいものとなっている。特に冒頭の部分に注目してみると、「したぶる（ひたぶる）」、「うら悲し」といったどちらかという日本詩情に親しい意識ともされる過度な叙情が付け加えられていることは否定できないだろう。もちろん原文も秋の風をヴァイオリンの哀しい響きにたとえているのだが、どちらかというとその響きを強調するためにヴァイオリンは「sanglots」（すすり泣く）必要があったのではないか。ため息をついた程度ではヴァイオリンの響きは読者には伝わって来ないかもしれないが、より静かな叙情が読み取れる。<sup>39)</sup>そして原文ではヴァイオリンがすすり泣くことによって、主人公も涙ぐむ情景が続くのだが、敏訳では泣いているのは主人公だけである。ヴァイオリンのためいきは詩の空間全体を満たしているようである。一方、大學の詩を見ていく。

#### 秋の歌 ヴェルレエン

秋の  
ヴァイオリンの  
節ながき啜泣  
もの憂き哀みに  
わが魂を  
痛ましむ。

時の鐘  
鳴りも出づれば  
せつなくも胸せまり  
思ひ出づる



わが来し方に  
涙は湧く。

落葉ならね  
身をば遣る  
われも、  
かなたこなた  
吹きまくれ  
逆風よ。<sup>40)</sup>

敏訳は「落葉」という題名を用い、また詩の末尾に「落葉かな」という言葉を持ってくることによって落葉が主役の訳詩テキストとなっていた。大學訳は「秋の歌」という題名を付けているが、こちらの方が「Chanson d'automne」（直訳すると「秋の歌」）という原題に沿った題名である。訳文テキストを原文と照らし合わせて見ていくと、敏訳と比較して大學訳の方がより原文に忠実に訳していることがわかる。特に「sanglots」（すすり泣く）を敏は「ためいき」と訳出し、大學が「啜泣」としている部分が挙げられる。また大學は「節ながき啜泣」が聞こえることによって敏訳のように静かな叙情が詩全体に染み渡るのではなく、「わが魂を / 痛ましむ」ほどの感情を主人公にもたせさせるのだ。敏訳に比べて大學訳の方が原文に忠実に訳していることにより状況の説明が多くなっている。それに伴って敏訳にあったような、なんとかなしに物悲しさを感じる秋の叙情は失われているが自然の一部である風の音が人間に与えるより強い心の動きが表現されているといえるだろう。また秋の風の響きをすすり泣きと表現することによって、この秋の日に泣いているのは主人公だけではないということになる。それによってヴァイオリンにたとえられる秋の風の音、鐘の音、そして風が撒き散らす落葉のこすれる音が敏訳よりも強く詩全体に響いてくる。

大學は自らが読んで楽しんだ詩を翻訳して『月下の一群』に載せた、<sup>41)</sup> という趣旨から考えると、このヴェルレーヌの訳詩9編の間に何らかの共通点を見出させるのではないだろうか。先述した通り、大學が選択した9編の詩の中には自然を題材

にしたものが多く含まれている。そのいずれもが自然の情景に心情を描いたものであった。そしてこの「秋の歌」の末尾が自然、風の描写で終わっていることに注目したい。「落葉ならね / 身をば遣る / われも、 / かなたこなた / 吹きまくれ / 逆風よ。」。風によってあちらこちらに舞い散る落葉と自らを重ね合わせた最後の場面である。敏訳の方が舞い散る落葉の方に焦点が当たっているのに対して、大學訳は逆風の中で耐え忍んでいる誰かの方に読者の視点が集まってくるようである。他の8編との兼ね合いからくるのであれば自然の情景に描かれる人間の様々な感情により焦点が当たったほうが納得がいくだろう。

以上のように見ていくと、大學の訳詩の選択の方が詩全体に統一性が見られた。また文体の面からすると「Chanson d'automne」の訳詩テキストは他のものよりも文語に近い表現が使われているものの、全体的に敏訳よりは明らかに簡潔な表現と口語体に近い文体が用いられていることが判明した。

### おわりに

本論文は西欧詩の訳詩集の一連の流れの中で堀口大學編訳『月下の一群』の特徴を見てきた。編者が自ら詩を選び編集を行う作業を詞華集作成の重要な過程と捉えた場合に、西欧詩の訳詩集も詞華集の例として挙げられるのではないかと考えたからであった。『月下の一群』は先人の訳詩集とは異なり、大學がフランスをはじめとするヨーロッパ諸国及びブラジル等に滞在している時に読み楽しんだ詩が収められたものである。つまり大學の異国での青春時代とこの訳詩集は密接に結びついている。そういった趣旨から考えれば、選ばれたフランス近代詩同士にも関連性が当然のことながら存在するだろう。このような西欧詩の訳詩集という観点から『月下の一群』を考察した後、『海潮音』、『月下の一群』の両作品に共通して取り上げられた詩人としてヴェルレーヌに焦点を当て、その訳詩テキストの比較分析を行った。その結果、敏が訳した詩に比べて大學が訳した詩には、共通した詩の題材と比較的口語体に近い簡潔な表現が

見られた。訳詩集『月下の一群』のこれら特徴には、敏等と異なり西欧詩を日本文壇に紹介するといった文学者としての責務や文学的伝統から自由であった大學が自らの楽しみのために翻訳を行ったという訳詩集作成の動機が強く影響していると考えられる。また大學の西欧詩に対するその姿勢が当時の若い読者たちに支持されたからこそ、この訳詩集が成功をおさめることができたのではないだろうか。

## 注

- 1) 正岡、『日本近代文学大系第16巻 正岡子規集』、304
- 2) 吉海直人『百人一首で読み解く平安時代』角川学芸出版、2012を参照。
- 3) 丸谷、『丸谷才一批評集 第1巻』、17
- 4) 同上、14-15
- 5) 同上、51
- 6) 安藤、「解説」『月下の一群』(岩波書店)、647
- 7) 丸谷、『丸谷才一批評集 第1巻』、59
- 8) 吉田解説、『日本近代文学大系第52巻 明治大正訳詩集』、61
- 9) 例として竹内節編『新体詩歌』(1886)や山田美妙編『新体詞選』(1886)などが挙げられる。
- 10) 上田、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』、1
- 11) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、535
- 12) 飯島、『飯島耕一・詩と散文』、120-121
- 13) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、535
- 14) 堀口、『月下の一群』(白水社)、626
- 15) 伊藤、「あとがき」『伊藤整詩集』、240
- 16) 大學は『スバル』に掲載された吉井勇の「夏のおもひで」(『スバル』1909年8月号)の口語体に強く影響を受けたと言われている。また大學は翻訳家として活動する前から新詩社に所属し、伝統から離れた若者の新鮮な観察眼が読み取れる詩歌を発表するなど新しい表現に親しんでいた。
- 17) 日本近代文学館、『日本近代文学大事典 第3巻』、205
- 18) 佐藤、『佐藤春夫全集 第19巻』、332
- 19) 上田、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』、1-2
- 20) 同上、15-16
- 21) 上田、「小生の翻訳(下)」、1
- 22) Lefevere, André. *Translation, Rewriting, and the Manipulation of Literary Fame*, London: Routledge, 2016を参照。
- 23) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、7

- 24) 本表は『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』と「月下の一群」『堀口大學全集 第2巻』を参考に筆者が作成したものである。
- 25) 上田、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』、77-79
- 26) 同上、87
- 27) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、52
- 28) モーランの作品における女性登場人物については次に詳しい。大村梓「ポール・モーランと横光利一：Champions du mondeと『上海』における新しい女をめぐる」、『比較文化研究』、93、133-140
- 29) 堀口、「北欧の夜」、188
- 30) 大學とモーランの関係については次に詳しい。大村梓「翻訳家堀口大學を巡る一考察-ポール・モーランという言説」、『山梨国際研究』、11、2016、1-11。
- 31) 上田、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』、76
- 32) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、124
- 33) 同上、126
- 34) 同上、126
- 35) 同上、127
- 36) 同上、128
- 37) Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, 72-73
- 38) 上田、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』、73-76
- 39) 佐藤伸宏氏は敏訳にはフランスの秋の風景の日本的な風情への置き換えが見られるとする(佐藤伸宏『日本近代象徴詩の研究』、31-48)。
- 40) 堀口、『堀口大學全集 第2巻』、124
- 41) 堀口、『月下の一群』(白水社)、623

## 参考文献

- \*引用に際して旧漢字は新漢字に改めた。またルビは一般的なものからは外した。
- 飯島耕一『飯島耕一・詩と散文 第4巻』みすず書房、2001
- 伊藤整 『伊藤整詩集』光文社、1954
- 上田敏 「小生の翻訳(上)・(下)」『読売新聞』、1909年8月1-2日
- 編訳、『海潮音(名著復刻全集近代文学館)』日本近代文学館、1968
- 大村梓 「ポール・モーランと横光利一：Champions du mondeと『上海』における新しい女をめぐる」、『比較文化研究』、93、2010、133-140
- 、「翻訳家堀口大學を巡る一考察-ポール・モーランという言説」、『山梨国際研究』、11、2016、1-11
- 佐藤伸宏『日本近代象徴詩の研究』翰林書房、2005
- 佐藤春夫『佐藤春夫全集 第19巻』臨川書店、1998
- 竹内節編『新体詩歌』晴庭堂、1886(国立国会図書館デジタルコレクション)

- 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第3巻』講談社、  
1977
- 堀口大學「北歐の夜」第2次『明星』、2（6）、1922、177  
— 188、
- . 『月下の一群』白水社、1952
- . 『堀口大學全集 第2巻』八木書店、1981
- . 『月下の一群』岩波書店、2013
- 正岡子規『日本近代文学大系 第16巻 正岡子規集』角川  
書店、1972
- 丸谷才一『丸谷才一批評集 第1巻』文藝春秋、1995
- 山田登世子『「フランスかぶれ」の誕生』藤原書店、2015
- 山田美妙編『新体詞選』香雲書屋、1886（国立国会図書館  
デジタルコレクション）
- 吉井勇 「夏のおもひで」『スバル』、8、1909、1—9
- 吉海直人『百人一首で読み解く平安時代』角川学芸出版、  
2012
- 吉田清一解説『日本近代文学大系 第52巻 明治大正訳  
詩集』角川書店、1971
- Lefevre, André. *Translation, Rewriting, and the  
Manipulation of Literary Fame*, London:  
Routledge, 2016
- Verlaine, Paul Marie. *Œuvres poétiques complètes*, Paris :  
Gallimard, 1962